

金融資本にかんする一考察

小 牧 聖 徳

近年におけるアメリカでの「自己金融」の発展により、銀行と産業との融合癒着、独占というレーニンの規定がも早、貫徹しないとして、金融資本にかんする定義を修正すべきであるとの見解も一部にみられるが、これは銀行と産業との融合癒着の内容にかんする無理解さ、特に銀行資本にかんする本質理解の不充分さに発した見解といえる。銀行資本の正しい理解に立ち、癒着の内容を正しく理解することによって金融資本の正しい理解に到達し得るものといわなければならない。本稿では主として理論的観点から金融資本にかんするヒルファーディングおよびレーニンの規定をまず検討し、銀行資本のしめる位置および役割を究明し、金融資本において銀行資本の果たす役割を産業資本同様に正当に評価し、金融資本概念の充実化をこころみようとするものである。

—

金融資本についてはヒルファーディングがその著「金融資本論」(Finanzkapital)において解明し、銀行と産業との融合を論じたのであるが、同書で彼は「産業の資本のうちますます増大する一部分は、これを充用する産業

資本家のものではない。彼等は銀行を通じてのみ資本の処分権を与えられ、銀行は彼等に対して所有者を代表する。他面、銀行は、その資本のますます増大する一部分を産業に固定せざるを得ない。これによって、銀行はますます大きい範囲で産業資本家になる。かような仕方では現実に産業資本に転化されている銀行資本、したがって貨幣形態における資本を、私は金融資本と名づける。それは、所有者に対しては常に貨幣形態を保持し、彼らによって貨幣資本、利子つき資本の形態で投下されており、且つ彼らによって常に貨幣形態で回収される。しかし現実には、かようにして銀行に投ぜられた資本の最大部分は、産業資本に、生産資本（生産手段および労働力）に転化されていて、生産過程に固定されている。産業において充用される資本のますます増大する一部分は金融資本である。すなわち銀行によって支配され産業資本家によって充用される資本である」(Finanzkapital, S. 283 岡崎訳中) 九七頁) とのべ、金融資本を銀行によって支配され産業資本家によって充用される資本と規定したのである。レーニンはヒルファードィングの規定に欠けている独占の契機を強調して「生産の集積、そこから発生する独占、銀行と産業との融合あるいは癒着——これらの諸点に金融資本の発生史と金融資本の概念の内容がある」(帝國主義論、堀江訳六五頁)、と規定し、ドイツ、アメリカ其の他における金融独占資本の実態を分析した。レーニンはさらに「すべて定義というものは、けっして現象の完全な発展におけるその全面的な連関を包括出来るものではない」(前掲書一二七頁)、という定義のもつ制約のもつて、

(一) 生産と資本の集積は高度の発展段階にたつし、経済生活において、決定的な役割を演じている独占をつくりだすまでになったこと、(二) 銀行資本と産業資本との融合と、この『金融資本』を基礎とする金融寡頭制の形成、(三) 資本輸出が商品輸出とは別にとくに重要な意義をもっていること、(四) 国際的・独占的資本家団体が成立して世

界を分割していること、(四)地球の領土的分割が資本主義的最強国により完了されていること(前掲書二二七頁)という帝国主義にかんする有名な定義を与えている。ここで金融資本の占める位置は、その成立の客観的条件は、経済における独占の形成がみられるということを前提条件として必要とするということである。これが金融資本成立の基礎条件である。かかる前提条件のもとで金融資本は、産業資本と銀行資本の融合で形成されて対内面における支配的資本となり、他方、対外的には資本輸出、世界の分割へと推進して行く中核となる。すなわち「独占体と金融資本との支配がつくり出され、資本の輸出が顕著な重要性をもつにいたり、国際トラストによる世界の分割がはじまり、資本主義的最強国によるいっさいの領土の分割が完了している」(前掲書二二七頁)資本主義の一段階での支配的資本となる。独占段階では「独占体と金融資本との支配がつくり出され」(前掲書二二七頁)るが、「独占体と金融資本との支配」において独占体の支配と金融資本との支配とが同列にとりあつかわれ、独占体と金融資本のいずれか一方の支配ではなくて両者の支配が説かれている。それ故「金融資本」は「独占体」と必ずしも同じではないとみなされるような根拠が、右の「独占体と金融資本との支配」という叙述の中にある。しかし「支配」においては同一機能をもつわけであるから「支配」という同一性の中での独占体と金融資本との相違点と両者の相互関連を明らかにすることは、金融資本を独占体と同一物として理解することの当否を決定づける。ところで独占体は組織体であり独占資本はその物的基礎である。しかも独占資本は支配する資本であり、金融資本もまた支配する資本であるから、独占資本と金融資本とは金融独占資本として、もしくは独占金融資本として経済全体を支配する資本としては正に同じものといえる。それにもかかわらず「独占体と金融資本」とを併記した意味は、一方は独占体の物的側面として「生産と資本の集積」(前掲書二二七頁)という社会的基礎条件に力点があ

かれ、それを主体的に表現すれば独占体となり、他方、金融資本は「銀行資本と産業資本との融合」（前掲書二二七頁）という構造的契機に力点がおかれ、いわば成立構造的側面において把握したものといえよう。それ故、金融資本は、その成立の社会的基盤としては独占を前提とし且つ独占と密接不離の関連におかれ、独占的支配力をもつ資本として機能し、その資本としての成立の構造的契機は銀行資本と産業資本との結合である。そしてその結合の形態は株式保有、融資、人的交流にみられる。このように独占資本と金融資本において独占資本は独占体の物的基礎であり、他方、金融資本は金融寡頭制の物的基礎であり、一方は独占的支配という社会的機能的側面に力点を置き、他方は独占的支配をする主体の構造的側面に力点を置いた表現といえるから、観点の相違による表現の相違で本質的には相違はない。そしてこれらの人格化されたものとしての独占体と他方、金融資本家すなわち金融王については、独占体は組織体であるが金融王はかかる組織体を前提として成立する支配者（組織体ではない）としていわば大資本家であり、少数の金融王による経済全体の支配体制が金融寡頭制である。それ故、主体的構造的側面に力点をおいたものとして金融寡頭制・金融資本があり、社会的機能的側面に力点をおいたものとして独占体・独占資本があり、本質的には相違しないが観点を異にした結果として「独占体と金融資本との支配」という表現をみたものといえる。他方、ヒルファードディングの理論はドイツの資本主義の後進性の故に、産業資本と銀行資本との融合を強調しつつ、銀行優位の金融資本の典型を示すものとなった。⁽¹⁾

二

ところで近年アメリカにおける自己金融の発展をみて銀行優位のドイツ型金融資本が、アメリカには見られな

いとしてレーニンにみられる金融資本の規定は再検討されるべきであるとの見解が一部に生じつつある。金融資本における独占の契機を是認しつつ、その成立をもたらしした銀行と産業との融合・癒着がアメリカにおいては減退しつつあるとする見解は、融合癒着の内容の理解に欠けた謬見というほかはない。けだしドイツにみられた金融資本の実態は銀行優位の状態での銀行と産業との融合癒着と独占であり、アメリカにみられる金融資本の実態は産業優位の状態での銀行と産業との融合癒着と独占の典型とみるべきであり、その成立過程における癒着関係と独占的支配とは貫徹しつづけているというべきである。すなわち独占資本としての性格をもつ金融資本は、その成立の論理構造は両資本の融合癒着であり、いずれが優位に立つとしても、それは等しく独占的支配力を生み出すこととなる。すなわち銀行優位において成立する金融資本グループもしくはかかる状態の金融資本の支配する国家においては、銀行の貨幣資本の供給の特定企業への集中を媒介として、企業の資本の有機的構成の高度化、大規模化、大量生産、市場支配を生み出すが、さらに他企業の吸収、もしくは合併を通じて資本集中がすすみ、独占的支配力をもつ程に企業が成長する段階に達するまで、銀行よりの融資はつづくこととなるが、一定の段階において独占的企業の協定においてその独占的支配力は一段と拡大され、かかる独占力を利用した独占利潤を源泉とする企業の内部留保の増大（蓄積と減価償却基金の増大）から、銀行よりの借入依存度の減退化傾向をみてアメリカにみられる産業優位の現象を生むこととなる。そしてかかる大企業の内部留保の増大には、国家が特別償却制度等を通じてそれを促進し大企業を一層強化しようとする傾向がある。しかし産業優位の金融資本に成長する過程的現象としては、特定企業に対する銀行資本の供給増加による銀行と産業との融合癒着は不可避であり、貨幣資本の供給を媒介として両資本の利害は正に共通する。⁽²⁾

さらに大企業が独占力と自己金融力をもち得て銀行よりの資金供給に強く依存しなくなった状態においても、依然として両資本の融合癒着は継続するのであり、その場合には産業優位において両資本は結合をつづけ、銀行よりの貨幣資本供給が逆転して産業よりの銀行への貨幣資本供給となる。かくして生じた銀行の余裕資金は、消費者および国家へ振向けられ産業資本の生産品を購買するために消費者支出、国家支出を通じて産業資本の売上金として再び銀行に還流する。銀行はそれを貨幣取扱の側面において受入れ、それを結合大企業以外の分野へ再び貸付けることにより、結合大企業の生産した商品の市場をさらに開拓する。すなわち消費者金融、国債保有を通じて大衆や国家に購買力を賦与することによって独占企業の商品を実現させ、それを通じて独占企業に高利潤を入手させ、それは大企業の内部留保の増大を促進し、それは再び銀行を通じて市場支配の用具として利用されて、市場支配の基盤を形成させることとなる。さらに国内市場にとどまらず、海外市場への資本輸出において、独占企業の商品輸出を促進し、且つみずからの利益を増大させる。そのさい銀行の海外支店と貨幣取扱操作（世界貨幣として機能する貨幣や、外貨の受取・支払・保管・決済等）は重要な役割を果すこととなる。ここに両資本の結合はいよいよ不可分である。したがって産業と銀行との融合・癒着関係は、自己金融が発展して銀行が産業への融資を減退させる様な状態においても、産業より銀行への預託（産業に対する連転資金の貸出の反映としての預託を含めて）を通じて継続し、内外市場支配を一層増進することとなる。その意味で金融資本における独占の契機とも、両資本の融合・癒着の契機は依然として貫徹することとなる。そして産業資本と銀行資本との融合癒着は、銀行資本からみれば銀行の貨幣取扱と貸付の二側面のそれぞれの発現によって、そこに産業資本との間の融合癒着が生ずるのであり、銀行よりの貸出、産業の側での借入のみが融合癒着の内容なのではなく、その逆の場合す

なわち産業よりの預託、銀行の側での受入れもまた融合癒着であるといわなければならない。そして銀行は受入れた資金を国内市場に対してのみならず海外市場に対しても融通することにより、独占資本の支配力の増大に貢献する。ここに支配力増大のためには銀行資本と産業資本の融合癒着は不可避であり、またいよいよ不可欠なこととなるのである。

ところで、かかる金融資本を理解するのに株式会社において具体化されるとして、金融資本の具体的形態を株式会社においてとらえようとする観方がある。株式会社において金融資本をみるには、その株式会社が (一) 独占的支配力をもつ株式会社で (二) 他の株式会社の株式を保有している株式会社である、という特別な要因をもつ株式会社でなければならぬ。それ故、金融資本は株式会社において具体化されるとしても、それは株式会社がすなわち金融資本ではなくて独占的支配と融合癒着という二要因を、しかも極めて重要な要因をもつ株式会社である。いわば特殊な要因を内含した株式会社にしてはじめて金融資本の具体的形態となり得るが、特殊な要因すなわち独占と融合癒着がその決定的重要性をもつのであり、株式会社たることが決定的意味をもつのではない。けだし単なる株式会社でなく、独占的支配力をもつ株式会社の結合が金融資本であり、金融資本の場合には独占的支配力こそが必要なのであって、株式会社は独占力を手に入れる為の具体的条件にすぎない。条件とその条件がみだされて独占的支配力をもつに至るといふことは別問題である。したがって株式会社たることが金融資本にとって決定的意味をもつわけではなく独占的支配力こそが決定的意味をもつ。第二に融合癒着において成立する金融資本という場合の融合癒着は株式会社を前提とすれば、株式の相互保有を基幹とすることになるが、融合癒着は其の他、融資関係、さらに人的交流の姿をとるわけであり、融資関係、人的交流による融合癒着は株式会

社に多くみられるとしても株式会社にのみ固有のものではない。銀行よりの貸出、産業よりの銀行への預金という融資関係による融合癒着においては、株式会社たることによる株式の相互保有と同様の相互依存関係があるのであつて、融合癒着を株式の相互保有に限定する必要はない。かかる株式の相互保有の為の前提条件としては、株式会社たることを不可欠とするが、融合癒着においては株式の相互保有を含んだ、より一そう広汎な相互依存関係があるのであるから、株式会社ということのみとらわれる必要はなく、むしろ融合癒着にこそ意味があるのである。融合癒着の具体的形態の一つとして、株式会社たることは、金融資本にとっては重要な条件であるにしても、それのみで必要不可欠な条件が充されたことにはならないのである。金融資本にとっての必要不可欠な条件は、それが産業資本と銀行資本の相互の融合癒着において成立するということ、より重要なのは独占的支配力をもつということであつて、株式会社たることは、かかる融合癒着と独占的支配にとつて有利な企業形態であることは否定出来ないとしても、株式会社が金融資本ではない。株式会社の結合において成立し独占的支配力をもつ資本たることがその重要な点である。機能的に独占資本であることと、その成立過程は結合資本であることが核心なのであり、株式会社は結合資本の一つの形態を示すにすぎず、結合資本は株式会社を含めた、より一層広汎な内容をもつものである。

銀行が特定の企業に特に集中融資するのは企業が株式会社だからではなくて巨大な株式会社だからであり、すなわち独占力をもつ強力な企業だからである。他方、企業が特定の銀行へ預金するのも株式銀行だからではなくて株式組織をとる程の大銀行であり、強力な金融活動をなし得る銀行だからであるか、あるいはかかるものに発展させて、みずからに奉仕させ得る銀行だからであつて、株式銀行だからではない。株式銀行だからではなくて

株式組織をもつ程の有力銀行だからにはかならない。

三

元來、金融資本は産業資本と銀行資本の融合・癒着において成立する独占的資本でありヒルファーディングの見解をレーニンが修正し、スイージは独占資本としてとらえているが金融資本の内容は、いわば融合独占資本もしくは「巨大結合資本」といえよう。すなわち、個別的企業的観点からすれば個人資本の集合としての株式資本の形態をとり、それがさらに他人資本を集合して大資本を形成し、産業、商業、金融等の各部門において活動する大資本となり、これら独占的産業資本、独占的銀行資本の相互結合において頂点に達する巨大結合資本である。一面よりみれば巨大結合資本は貸付、投資の面で活動する巨大銀行資本であるが、他面よりみれば生産、流通の領域で機能する巨大産業資本でもあり、この巨大産業資本と巨大銀行資本とは証券（株式、社債）を通じて、および貸付、預金を通じて、いわば貨幣資本を媒介として相互に結合し、さらに人事交流を通じて結合を強化し、産業、金融を含めて経済界全体を支配するに至る資本である。個別的企業における資本の結合および企業と企業との相互間においての資本の結合、大企業と大銀行との相互間においての資本の結合において成立する資本なるが故に、そして独占的支配力をもつ資本なるが故に、金融資本ははたがって、その成立過程を貫徹する原理的作用に着目すれば巨大結合資本といえよう。機能的には独占資本であるが、成立過程よりみれば結合資本であり、独占段階におけるその支配力の増大は結合資本の大規模化にあり、したがって巨大結合資本にほかならない。しかし結合資本がすなわち金融資本なのではなく独占的支配力をもった結合資本が金融資本なのである。また一産業

部門の大資本がすなわち金融資本ではなく銀行と産業の融合・癒着によって成立した独占資本が金融資本なのである。その意味で金融資本は機能的には独占資本で銀行と産業との融合・癒着により成立する巨大結合資本なのである。独占資本でなければ金融資本ではないし、銀行との融合癒着関係をもたない独占資本は金融資本ではない。⁽⁴⁾しかし独占資本は銀行との関係を無視して成立し得ないから、独占資本は金融資本と本質的には同義であるといえるが銀行優位の金融資本、産業優位の金融資本、すなわちドイツ型金融資本、アメリカ型金融資本等各国の特殊事情による金融資本のあり方の相違は、原理的には融合の仕方の相違なのであって、融合癒着を否定するわけのものではないし、独占資本たることは各国に通ずる一般的性格なのである。同一国家内においても銀行優位のグループと産業優位のグループがある。また国によってもドイツ型の銀行優位の金融資本とアメリカ型の産業優位の金融資本がある。しかしいづれも金融資本たることを否定しない。それらはいづれも銀行と産業との融合癒着において成立し（その癒着の仕方には産業優位、銀行優位の違いはあるとしても）、且つ今一つ重要な側面として機能的には独占的支配力をもつ資本だということである。

ところでこのような金融資本の一般的動向としては、産業資本に対する銀行融資より兪して大企業の形成を助長し、産業と銀行との結合において国内市場を支配しつつ、対外的には国際的市場に対する商品輸出を増大させるとともに、さらにそのほか対外投資に向う。産業資本の蓄積した資金を取扱う銀行資本は、資本輸出の尖兵として産業資本の独占力増大の為に国内市場におけると同様、国際的領域にまで進出する。したがって産業資本と銀行資本との相互依存、結合関係は分離することなく継続し、いよいよ結合の度合を強めることによって両資本の統一体としての金融資本の国内、国際両域における支配力は、いよいよ強大なものになるといわなければなら

ない。

国家資金はかかる国内、国際両域に支配力を増大しようとする金融資本のため、金融資本の安全性を保証し、収益性を保証する役割を果すものとして、金融資本によって引出され利用される金融資本の後援者である。ここに金融資本と国家資本との結びつきがみられ、現代資本主義の特徴である国家発展のためという名においての金融資本のためにする金融資本擁護、強化があらわれる。その具体化は、国内的には金融資本の一翼をなす巨大企業に対する国家資金の融資集中、大口需要（たとえば国防支出等）、対外的には国家資金による輸出金融、海外進出金融において、まず国家資金の危険負担で金融資本の安全性を保証し、国家資金の低利、長期融資で金融資本の収益性を保証することにみられる。

また金融制度の中核として政府の銀行、銀行の銀行としての立場にある中央銀行も中央銀行対政府との関係としては、相対的な中立的立場を占め得るとしても、政府を媒介とする金融資本の圧力に対して、絶対的中立たり得るものではない。それゆえ、その使命達成（通貨価値安定）のためにする金融政策も不安定な状態のもとで遂行されざるを得ない。けだし資本主義国家に由来する不可避性といわなければならない。

現代資本主義における国家資金の増大化傾向のなかで依然として国家資金に左右されず、逆に国家資金を利用する立場に立つて支配力をもちつづける金融資本は、その不可欠の構成要因として銀行資本をもち、この銀行資本と産業資本との相互依存、融合癒着においてその支配力をいよいよ増大することとなる。それ故、銀行資本を理解することは現代資本主義を理解するためにも、いよいよ必要不可欠なこととなつてくるのである。⁽⁵⁾

註(1) 「金融資本においては、すべての部分的資本形態が全体性に合一されて現れる。金融資本は貨幣資本としてあらわれ、

そしてじつさい貨幣資本の運動形態の、貨幣を生む貨幣、資本運動の最も一般的で最も無概念的な形態をもっている。貨幣資本としては、それは、貸付資本と擬制資本との両形態で生産的資本家に用立てられる。その媒介をなすものは銀行であり、銀行は、同時に、ますます大きな部分を自己の資本に転化しようとし、それによつて金融資本に銀行資本の形態を与える。この銀行資本は、ますます、現実に機能する資本すなわち産業資本の単なる形態——貨幣形態——となる。……銀行資本と生産的資本との分離は金融資本において止揚される」(Finanzkapital S. 296 岡崎訳(中)一一四頁、傍点引用者)として銀行優位の金融資本を説明し、また「金融資本は株式会社の発展とともに発展し、産業の独占をもつてその頂点に達する。産業収益は、より確実でより恒常的な性格を得る。それとともに、銀行資本の産業への投下可能性は、ますます広大な外延を得る。しかし銀行資本の処理権をもつものは銀行であり、銀行に対する支配権をもつものは銀行株式の過半数の所有者である。所有の集中の進展につれて銀行に対する支配力を与える擬制資本の所有者と、産業に対する支配力を与える擬制資本の所有者とがますます同じものになることは明らかである。……大銀行はますます擬制資本の処分力をも獲得するので、これら二部類の所有者はますます同じものになる。われわれは産業がますます銀行資本に、従属するに至るのを見たが、それは決して産業貴族もまた銀行貴族に依存するようになるということの意味するものではない。むしろ資本そのものがその最高の段階において金融資本となるように、資本貴族が、金融資本家が、ますます国民的総資本の処理権を銀行資本の支配の形態において一身に合一するのである」(Ibid. S. 283~284 岡崎訳(中)九七~八頁、傍点引用者)として金融王が資本を一身に合一することを指摘しているが、銀行資本の支配を媒介としていわば銀行優位においてかゝる合一を説いている。このようにこれら引用文の行間には常に銀行資本の優位性が散見される。

(2) スイージは銀行資本が優位する時代を過渡的現象とみて、それにつづく産業の独占段階の支配的資本を独占資本としてとらえ、産業における自己金融の増大から銀行資本の作用を過少に評価しようとした(P. M. Sweezy: The Theory of Capitalist Development, P. 267~269 中村訳三六三頁~三六七頁参照)。

(3) 「借款の条件として、その借款額の一部分を債権国の生産物、とくに軍需品、船舶等々の購入のために支出することが定められると……こうして資本の輸出は商品輸出を促進する手段となる」(帝國主義論、堀江訳九三頁)。そして「そのさい重要な役割を演じているのは植民地に設置された銀行とその支店である」(同書九四頁)。

(4) 「金融資本とは産業的独占団体の資本と融合している独占的な少数の巨大銀行の銀行資本であり」(帝國主義論、堀

江沢一(二六頁)、したがって少数の巨大銀行の資本と融合している産業的独占団体の資本であるともいえる。すなわち融合を契機とする産業的独占団体の資本と独占的な少数の巨大銀行の資本との結合である。

(5) 「独占——これは『資本主義の発展の最新の局面』のかたる最後のことばである。しかし近代的独占の実際の力と意義にかんするわれわれの観念は、もし銀行の役割を考慮にいれなければ、極度に不十分で不完全で、またあまりに過少評価となるであろう」(帝国主義論、堀江沢、四一頁)。